

水の事故を防ごう

夏は海や川、山など、アウトドアでのレジャーを楽しむ機会が増える季節です。自然に触れるレジャーは、楽しみがある半面、自然ならではの危険もあります。水難事故を防ぐためには、自然を甘く見ず、危険をきちんと認識し、計画を立てて行動することが大事です。

<水難事故の発生状況>

毎年6月から9月は水難事故が多く発生しています。特に7月と8月は、夏休みやお盆の期間と重なることもあり、十分な注意が必要です。昨年（平成29年）岐阜県では33件（子どもの事故は3件）発生しています。また、16人（子どもは2人）もの死者が発生しています。

<水難事故の防止対策>

水難を未然に防ぐためには、以下のような点に留意する必要があります。

1 危険箇所の把握

魚とり・釣りでは、転落等のおそれがある場所、水泳や水遊びでは、水（海）藻が繁茂している場所、水温の変化や水流の激しい場所、深みのある場所等の危険箇所を事前に把握して、近づかない。

また、子どもを危険箇所に近づけない。

2 的確な状況判断

風雨、落雷などの天候不良時や上流で雨が降っているなど、河川の増水のおそれが高いときには、釣りや水泳を行わない。また、体調が悪いとき、飲酒したなどの際は海、河川に入らない。

3 ライフジャケットの活用

釣りやボート等で水辺に行くときは、必ずライフジャケットを着用（体のサイズに合った物を選び、正しく着用）する。

4 遊泳時の安全確保

掲示板、標識等により危険区域と標示された区域内に入らない。

遊泳区域以外の水域で遊泳しない。

遊泳中、他人に抱きつくなどの遊泳上危険な行為をしない。

遊泳に当たっては、水深、水流を考慮し、安全な方法で遊泳する。

5 保護者等の付添い

子供の水難事故防止のため、子ども一人では水遊び等をさせず、幼児や泳げない学童等には、必ずライフジャケットを着用させ、その者を保護する責任のある者が付き添うなどして、目を離さないようにする。



<溺れた人を助ける方法>

いくら泳力に自信がなくても、目の前で子どもが溺れていたなら、すぐに飛び込んで助けてあげたい！というのが親心だと思います。しかし、本当に助けたいのであれば、落ち着いて、確実に救助できるような方法をとりましょう。

1 たった一人で救助に向かうことは非常に危険です。必ず協力者を探してください。

救助を見守る人、岸で器具や手を差し伸べる人、警察や消防署に通報する人など、複数の応援が必要不可欠です。

2 ペットボトル、竹、棒など、あらゆる器具を用いて、複数で救助活動する。

ペットボトルなどは、少し水が入っていた方が遠くに投げることができ、相手に届きやすくなります。

飛び込んで助けに行くのは、最終手段ですので出来るだけ水に入らずに助けることを考えてください。

